

ワーグナー

Richard WAGNER

1 歌劇《リエントツイ》序曲

Rienzi - Overture

11'38"

2 歌劇《さまよえるオランダ人》序曲

Der Fliegende Holländer - Overture

10'52"

3 歌劇《タンホイザー》序曲

Tannhäuser - Overture

14'49"

4 歌劇《ローエングリン》第1幕への前奏曲

Lohengrin - Prelude to the Act I

9'54"

フィルハーモニア管弦楽団

Philharmonia Orchestra

指揮：オットー・クレンペラー

cond. by Otto KLEMPERER

Recorded: 2 - 3 March 1960, Kingsway Hall, London (1)

24, 25 February 1960, Kingsway Hall, London (2)

23 & 24 February 1960, Kingsway Hall, London (3)

25 February & 3 March 1960, Kingsway Hall, London (4)

Producers: Walter Legge, Walter Jellicoe

Balance Engineer: Douglas Larner

Remastering Engineer: Andrew Walker

50年以上前の録音とは思えない

クオリティを示すサウンド

オットー・クレンペラーは1960年から翌61年にかけて、ライルハーモニア管弦楽団を指揮して合計15曲の管弦楽曲を録音し、LP3枚からなるワーグナー・アルバムを作りあげた。CD時代になってからはディスク1枚あたりの収録時間が増えたこともあり、2枚のCDに再編されていたが、このたびのSACD化によりオリジナル・カットリミックスにされ、3枚のアルバムとして再登場することになった。これはその第1集に当たるもので、ここに収録されている4曲は1960年の2月と3月にロンドンでのキングズウェイ・ホールで録音されたものである。

クレンペラーは若き日に主にドイツの劇場でオペラ指揮者として活躍していたが、そこではワーグナーの主要なオペラをほとんど取り上げていたという。しかし残念なことに、クレンペラーが指揮したワーグナーのオペラ全曲録音は、1968年の《さまよえるオランダ人》しか残されていないので（《ワルキューレ》も全曲録音する予定だったが、未完成に終わった）、この管弦楽曲集はクレンペラーのワーグナー解釈を聴くことができる貴重なアルバムといわねばなるまい。

このディスクに収録されている4曲は、いずれも遅めのテンポによるどっしりと構えた演奏となっており、重量感のあるワーグナーが味わえ

るが、それでいて音楽が停滞することは一切ない。《タンホイザー》での「巡礼者たちの合唱」による厳かなテナーから「ヴェーヌスベルクの場面」への転換など、実に見事に音楽が展開されてゆく。堂々と構えながら、音楽が常に前に進んでいくところがクレンペラーの凄さであろう。そしてこのたび、クレンペラーの遺産ともいえるこのワーグナー・アルバムが、シンゲル・レイヤー・ディスクとしてSACD化されることになった。キングズウェイ・ホールの豊かな残響を伴ったオーケストラ・サウンドは、LP時代から名録音として定評があったが、それがSACDではどのように蘇るのか、興味津々の音楽ファンも多かったことだろう。今回のSACD化にあたっては、EMIのアーカイヴに保存されているテープの中から最良のマスターを厳選し、当時のEMIの音を知るアディ・ロード・スタジオの熟練のエンジニアたちによって入念にリマスタリングされ、DSD変換までが行なわれたという。しかも昨今当たり前に行なわれているインターネットを通じた伝送ではなく、ロンドンのアディ・ロード・スタジオで制作されたAITT（カットインク用マスター）を日本に空輸しているのだという。つまり英EMIの最新の技術を駆使し、この名演奏を最高の音で再生させるための手間が惜しげもなくかけられたというわけである。

筆者は2006年に発売された国内盤の通常CDと比較試聴したが、こ

れとは比較にならないほど音質が改善されている。まったく別次元の音に仕上がっているといってもよいだろう。極端に言えば、演奏全体を覆っていたヴェールが取り払われたように感じられるほどで、とても50年以上前の録音とは思えない。特に《リエッツィ》冒頭のトランペット・ソロや《ローエングリン》冒頭の弦楽器など、弱音の部分で優れた効果を発揮しており、曖昧さの一切ない輪郭のはっきりした音がスピーカーから飛び出してくる。背景にうっすらと聴こえていた持続ノイズもSACDではほとんど感じられなくなった。

各楽器の分離もとてもクリアになっている。例を挙げれば《タンホイザー》のバツカナーの部分でのタンブリンのロール打ちの鮮やかさであるうか。その音の粒立ちの良さは舌を巻くほどの凄さである。全体に音楽がとても聴きやすくなり、演奏の素晴らしさがストリートに伝わってくる。聴き手はクレンペラーが紡ぎ出すオーケストラ・サウンドを、最高の状態で存分に楽しむことができるようになったわけである。これによりクレンペラーの再評価も促されるのではないだろうか。非常に意義のあるSACD化といつてよいだろう。

ワーグナー

歌劇《リエッツィ》序曲

《リエッツィ》はリヒャルト・ワーグナー（1813～1883）が書いた比較的初期のオペラのひとつで、1842年にドレスデンで初演されている作品である。しかし《リエッツィ》は、翌1843年に初演された《さまよえるオランダ人》以降の作品に比べると、全曲が舞台上演される機会に極めて少なく、現在ではこの序曲だけがもっぱらコンサート・ピースとして演奏されている。初期作品ということもあり、先輩作曲家であるワーグナーの影響を感じさせる部分もあるが、音楽が次第に高揚して行進曲風の主題が勇壮に奏される部分などワーグナーらしいドラマ性も十分で、山あり谷ありの演奏効果に富んだ作品に仕上がっている。

歌劇《さまよえるオランダ人》序曲

1841年に完成、その2年後にドレスデンで初演された、ワーグナー初期の名作オペラである。7年に一度しか上陸することを許されない呪われたオランダ人の船長が、彼との純愛を誓う少女ゼンタと出会い、彼女の犠牲によって永遠の救済を得るという物語。序曲は歌劇中に登場するオランダ人の船長の呪いの動機によって荒々しく始まり、ついでゼンタの動機がコーラングレによって美しく歌われる。曲はふたたび激しい

嵐の部分となり、いったん静まると水夫の動機が聴こえてくる。最後は呪いの動機とゼンタの動機がもつれ合い、盛り上がり過ぎてゆく。

歌劇《タンホイザー》序曲

《タンホイザー》は1843年から1844年にかけて作曲され、1845年にドレスデンで初演されたオペラである。12～13世紀ドイツのチューリッゲン地方にあるヴァルトフルク城で行なわれていた歌合戦と、ミンネゼンガーという吟遊詩人にまつわる伝説をもとにしている。「異教の女神ヴェエヌスに誘惑されてその官能の虜になってしまった吟遊詩人タンホイザーが、彼を愛するチューリッゲンの領主の姪エリーザベトの自己犠牲によって救済される」という物語である。

序曲は3つの部分から構成されている。第1部はオペラの中で歌われる敬虔な巡礼者たちの合唱の厳かなテーマ。続く第2部は対照的なヴェエヌスバルクでの饗宴（パッサカール）の音楽。そして第3部は再び巡礼者たちの合唱。しかし今度は規模が拡大されており、序曲はそのままクライマックスを迎え、華やかに閉じられる。

歌劇《ローエングリン》第1幕への前奏曲

《ローエングリン》は、《タンホイザー》に続いて1848年に完成され

た3幕のオペラで、これもドイツ中世の伝説を基にしている。「聖杯を護る騎士ローエングリンは、アントワープの若い領主の姉エルザを無実の罪から救って結婚するが、エルザがローエングリンとの誓いを破って彼の素性を問うにおよんで、ローエングリンはやむなく立ち去る」という物語。第1幕への前奏曲は、このオペラを中心となる聖杯の動機を中心にまとめたもので、神秘的な和音によって静かに開始される。曲は次第に盛り上がり過ぎてゆき、クライマックスで「ローエングリンの動機」を高らかに歌い上げた後、再び静まって消えてゆく。

オットー・クレンペラー

1884年5月14日に当時のドイツのドレスラウ（現ポーランドのザロツワフ）に生まれ、1973年7月6日にスイスのチューリヒで没した20世紀を代表する指揮者。ブライツツナーに師事。1906年にデビュー、翌年ブライナーに認められてブライハのドイツ歌劇場の指揮者になり、以後各地の歌劇場の指揮者を歴任。ナチスの台頭を逃れて1933年にアメリカに亡命した（戦後ドイツ市民権を回復、最終的にはイスラエル国籍となった）。1954年にはワイルハーモニア管弦楽団の首席指揮者に就任してこのオーケストラを名門に育て上げ、1964年に自主運営のニュー・ワイルハーモニア管弦楽団として再スタートした際には名誉会長兼終身指揮者の称号を授けられた。

（高木正幸）

SACD (Super Audio CD) について

SACDとは、CDの開発者であるソニーとフィリップスによって共同開発された新世代のオーディオディスクです。音楽の感動を余すことなく伝えるために、録音周波数帯域を100kHzまで拡張し、サンプリング周波数1200kb以上（可聴帯域内）と大幅に拡大。その結果、自然発在する音のほとんどすべてを捉えることが可能になりました。SACDでは、従来のPCM方式とは異なったDSD (Direct Stream Digital) と呼ばれる信号の記録再生変換行程が採用されています。この行程により、音の鮮度をほぼそのまま保ち、音楽信号のほとんどすべて、さらに演奏会場の空気までも忠実に再現することできます。



DSD (Direct Stream Digital) について



DSD方式とは、アナログ信号をデジタル/シグナル変換器で高速1ビットのデジタル信号に変換し、直接記録するシコナー・デジタル方式、アナログ方式です。従来のCDに用いられているPCM方式に比べ、シングルで自然な音楽信号が再現できるため、アナログ信号に近く、音楽の空気感までも再現することができます。

シングル・レイヤー・ディスクとは
SACD (Super Audio CD) 信号のみの層（レイヤー）で構成されるディスクです。CD層とSACD層で構成されるハイブリッド・ディスクとは異なり、信号層を透過性にする必要がなく、ハイブリッド・ディスクの数倍の反射率を確保する事が可能になります。

このSACDディスクは一層式の構造になっていますので、SACD対応プレーヤーでのみ再生することができます。通常のCDプレーヤーでは再生できません。

〈取り扱い上のご注意〉 ●ディスクは両面共、指紋、汚れ、キズ等を付けないように取り扱ってください。 ●ディスクが汚れたときは、メガネふきのような柔らかい布で内周から外周に向かって放射状に軽くふき取ってください。 レコード用リナーや溶剤等は使用しないでください。 ●ディスクは両面共、鉛筆、ボールペン、油性ペン等で文字や絵を書いたり、シール等を貼付しないでください。 ●ひび割れや変形、又は接着剤等で補修したディスクは、危険ですから絶対に使用しないでください。

〈保管上のご注意〉 ●直射日光の当たる場所や、高温・多湿の場所には保管しないでください。 ●ディスクは使用後、元のケースに入れて保管してください。 ●プラスチックケースの上に重いものを置いたり、落としたりすると、ケースが破損し、ケガをすることがあります。